

[各教育関係副学長から]

新時代の学力観にマッチした入試改革をめざして

藤田 達生（三重大学副学長（教育（入試，高大連携，全学資格）担当））

教育担当副学長として入試改革を担当し、まず感じたのは、大学入試センター入試（1990～2020年）が終了して共通テストが導入されたにもかかわらず、本学教員の大部分においては高校生に関する学力観が変化していないことだった。それが如実に表れているのが、全学規模で総合型選抜についての議論がほとんどなされてこなかったことにある。

総合型選抜とは、旧 AO 入試を前提とし、必ずしも共通テストを用いなくてもよく、高等学校における成績や小論文、面接などで人物を評価し、入学の可否を判断する大学入試方法のひとつである。共通テストが導入された 2021 年度入試から、名称が AO 入試から変更された。

このような動きと密接に関係するのが、文部科学省が 2022 年度から高等学校の学習指導要領に「総合的な探究の時間」を設定し、課題解決能力の育成に本格的に取り組み始めたことである。これは、既に SSH 校などの高等学校では試行的におこなわれており、それが本格化したとみてよい。

最近、生成 AI が話題になったように、これまで通りの暗記型能力をたった一回の試験で問う入試では、新たな時代に対応しうる人材を育成することができない、との判断があったと理解している。「総合的な探究の時間」は、様々な課題を自ら主体的に解決する能力を養うもので、各大学における高大接続事業がそれをサポートし、その成果を総合型選抜で評価するようになったのである。

このようにして、近年の入試においては、旧来の学力観にもとづく一般選抜や学校推薦型選抜と、新たな学力観にもとづく総合型選抜のベストミックスが目指されるようになった。あわせて、総合型選抜の特徴としては、入学前教育をおこなうことによって、高校と大学との教育をつなぐことがめざされていることも指摘しておきたい。二つの入試には、理念の違いが鮮明である。

入試改革の背景には、18 歳人口の激減という厳しい現実もある。総合型選抜は「年内入試」ともよばれている。それは、9 月に学生募集が始まり、11 月には合格者発表がおこなわれることによっており、既に私立大学においては約 6 割が導入していると聞く。

つまり、優秀な学生を早く囲い込むという現実的な大学経営上の要請もあるのである。これに関連して、大都市圏内では年内に自宅通学可能な私立大学を 2・3 校受験して、合格したら共通テストは受験しないという近年の受験生の意識変化がある、との受験産業による指摘もある。

以上述べたように、AI 革命などによる社会の劇的な変化、そして急速な 18 歳人口減少への対応などが要因となって、総合型選抜は、今後、全国の国公私立大学において浸透してゆくだろう。ただし、入試改革そのものは、入学者の質を向上させ、大学をよくするための重要な方策であることを忘れてはならない。

従来の学力観にもとづく一発勝負型の入試のみでは、近年の社会状況に対応できないばかりか、入学後に能力が伸びるのかどうかまでは判定できない。様々な高大接続事業を高等学校の各年次に設定して総合型選抜とリンクさせて、本学に入学すれば魅力的な研究に出会い、望む就職が可能であることに気がつかせることが、生徒たちの能力を伸ばすための近道だと認識している。

これまでアドミッションセンターや入試チームと一緒に入試改革に取り組んできたが、本学においても総合型選抜を導入する方向が確認された。これからは、学部ごとに導入のための検討が進んでゆくが、これまで通り私たちも様々な側面からそれをサポートしてゆきたいので、どうかお気軽にご相談いただきたい。